

雅楽の旋律型の研究 : F' β 値を用いた『明治撰定譜・筆策譜』のパターン抽出を通して

竹下, 秋雄

<https://hdl.handle.net/2324/4475137>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	竹下 秋雄		
論文名	雅楽の旋律型の研究 F β 値を用いた『明治撰定譜・箏篳譜』のパターン抽出を通して		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 矢向 正人
	副査	九州大学	准教授 丸山 修
	副査	九州大学	准教授 西田 紘子

論文審査の結果の要旨

雅楽の旋律は、多数の旋律型の組み合わせで構成されており、それらは演奏家にも聴き手にも、経験的かつ無自覚的に認識されている。それらの旋律型を抽出し、意味と曲中での役割を明確にすることが、雅楽の演奏技術の継承及び教育において必須であるとの認識が、演奏家と聴き手に持たれていた。しかし、先行研究において記述されている旋律型は、雅楽の旋律型のごく一部であるにとどまっていた。本研究は、雅楽の標準的楽譜である『明治撰定譜』を対象に、主旋律を担当する楽器である箏篳のあらゆる旋律型を、統計手法を用いることにより抽出し検討することを目的としたものである。

本論文の構成は以下の通りである。本研究と目的と意義について述べた第1章、箏篳、旋律型、六調子、明治撰定譜についての概要と先行研究を述べた第2章に続き、第3章では、『明治撰定譜・箏篳譜』に記載される全72曲を対象に、請求者が考案したセル形式によるデータベースを作成し、パターンを抽出した。さらに、抽出されたパターンそれぞれについて、F値を改変した値であるF' β 値を求め、特徴を数値化した。第4章では、抽出されたパターンを、箏篳の演奏音源と照合することにより、コアパターン、接続パターン、補助パターンの3種に分類し、六調子である壺越調、平調、双調、黄鐘調、盤渉調、太食調のそれぞれについて、特徴的なパターンを検討した。第5章では、その検討結果をもとに、六調子それぞれの旋律の構成法について詳細な考察を行った。

本論文で得られた成果は、以下の点において学術的意義が認められる。

1) 雅楽の演奏及び技芸の伝承現場への指針の提供

雅楽における旋律型の重要性は、増本、寺内らの研究において示唆されているが、それを主題的にとりあげた研究例はこれまでに存在しない。本論文は、雅楽研究においてこれまで研究の俎上へのせられることが少なかった旋律型という側面に着眼し、その明確化を図った初めての研究である。論文では、既往研究で挙げられなかった旋律型が多数抽出され、その意味と役割が考察されているが、特に、太食調において下無(F#)が用いられる条件についての仮説と検証は画期的あり、プロの雅楽演奏家が箏篳を演奏する際の着実な指針となるものである。さらに、箏篳のみならず、同じ時代の雅楽曲の構造や演奏方法を検討するときにも、新たな知見を提供しており、雅楽研究に貢献することが期待できる。

2) 『明治撰定譜』の精確なデータ化

現在、伝統楽器の教育や芸の伝承現場においてもっとも求められているものは、演奏のために必要な情報が細大漏らさず記述されている精確な楽譜データである。雅楽譜のデータ化はこれまでもしばしば試みられているが、記譜の構造が複雑であることから、いずれも完成にいたらなかつ

た。本研究において、『明治撰定譜・箏篋譜』全72曲の完全なデータ化を行ったことは、雅楽の高度な分析研究に耐える楽譜データを研究者に提供するのみならず、雅楽の教育と伝承の現場における広範な使用を可能とするものである。

総じて本論文は、的確に問題設定されたうえ綿密かつ多角的に論証されている。データ化に際しては、楽譜のみに頼らず、自ら箏篋の演奏家として演奏を実践してきた知見も、随所に活かされている。また、背景をなす雅楽の音楽伝承の事情についても調査を行うなど、問題解決に必要な手順を十分に踏んでいる。増本等による先行研究の誤りも的確に修正されており、箏篋演奏家の楽譜解釈にとって確かな道標が呈示されている。全編にわたり学問的な正確さを追求しようとする研究姿勢に貫かれている本論文は、博士（芸術工学）の学位に値する。